



高校野球のマナーとルールを学ぼう (第36回)



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えしていきます。

マナー編 スムーズな、スピーディーな試合進行

「キビキビやろう」とよく言われますが、そのような高校野球の原点を教えてください。

多くの球技の中で、時間や得点の制限がないのがベースボールです。アメリカ生まれの競技そのもので、「自由(=競技時間は無制限)」と、「平等(=攻撃と守備の機会が均等に繰り返される。守備位置は自由に交代できる。)」を掲げた「米国民の象徴」ともされるスポーツです。しかし、「学校の課外活動の一場面」を考えれば、時間を大切に、また有意義に過ごさなければなりません。たとえば、駆け足、ダッシュ、全力疾走…と、場面にふさわしいスピード感が躍動を生むでしょう。それは、効率の高い練習、試合ではチャンスを持続させ、ピンチには気分を切り替える大きな役割を果たします。そして、何よりも「仲間や相手を待たせない」というマナーにも大きく関わっているのです。

ルール編 タイムの回数制限

投手が制球を乱し始めたので、捕手がタイムを要求し、球審も「タイム」を宣告しました。捕手はマウンドへ駆け寄り、主将の三塁手も行こうとしたところ、塁審から声をかけられて守備位置に戻ったように見えました。なんだったのでしょうか?

高校野球では試合の進行をスムーズにするため、タイムの回数とその時間に制限が設けてられています。塁審の声かけは、ルールを知ったうえでの行動か、もし知らなければ回数制限のあることを伝え、貴重なタイムについて確認したのです。

守備側のタイムについては、高校野球特別規則24項で、以下のように定められています。

(1) 守備側の伝令によるタイムの制限

a. 監督の指示を伝える伝令は、マウンドにいける回数を一試合に3回までとする。

(球審は伝令のたびに控え審判と回数を確認し、ベンチに知らせて応答を促します。)

b. 延長回に入った場合は、それ以前の回数に関係なく、1イニングにつき1回だけマウンドに行くことが許される。

c. この場合の伝令がマウンドに行くとは、ファウルラインを越えたかどうかを基準とする。

d. 伝令は、審判員が“タイム”を宣告してから30秒以内とする。

e. **内野手(捕手を含む)が2人以上マウンドに行った場合は、1回にカウントする。**

(上記事例はこの確認でした。)

f. 投手交代の際に野手がマウンドへ集まることや、この時に伝令がマウンドに行ってもタイムの回数にカウントしない。ただし、野手が定位置に戻り、投球練習が終了しようとする時に伝令がマウンドに行った場合は、回数としてカウントする。

g. 投手が塁や本塁のカバーリングをした後、内野手のうち2人が投手に近寄りマウンド周辺までついて行く場合、よどみなく自然の流れの中での動きと審判員が認めたときは、タイムの回数とは数えない。しかし、立ち止まって作戦の打ち合わせをしていると見なされるときは、タイムとしてカウントする。



貴重な作戦タイムを有意義に活用する。それも大切なチームワークです。